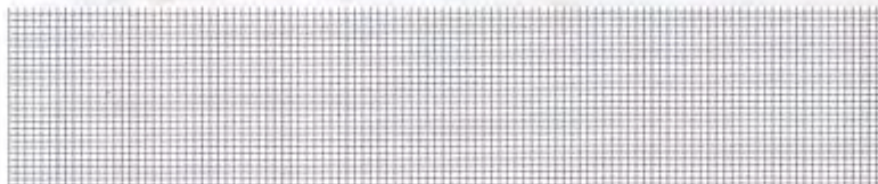


# 沖

# 7

2019

俳句雑誌【おき】



# 四千万歩

能村 研三

大牧広さんを悼む

大牧広さんが四月二十五日に亡くなられた。大牧さんには四年前の沖創刊四十五周年の記念大会の講演で、沖での先師との思い出などを話していただいた。

大牧さんは、沖を創刊してまもなく入会し、めきめきと力を発揮された方で、私もほぼ同時期に俳句を始め、いろいろな句会で一緒になり大いに刺激を受けた。かつては俳人協会に所属されていて、大牧さんは自註句集をかなり早い時期に出されている。

東京の桜が見事に花を咲かせた三月下旬、俳壇で最も権威のある蛇笏賞の発表があった。大牧広さんの句集『朝の森』が受賞されることを知り、早速この嬉しい知らせを仏壇の父に報告をした。しかし六月二十八の授賞式で、大牧広さんの晴れ姿を見ることできないのは残念でならない。

大牧広さんの第一句集『父寂び』には、

噴水の内側の水意けをり

箱庭は日没後も明るかり

初鰹海の蒼さの縞帯びて

伊能図の四千万歩夏至の月

真間山弘法寺

芽あぢさゝぬ一つ覚えの東歌

椎の花降つて菩薩の抱へ膝

葉桜の枝垂れに探す仰慕句碑

利根川河畔・布施

ながし吹く威を張り尽くす三方破風

芒種けふ目つぶし絵馬を見てゐたり

布施村は純子が里の芒種かな

米蒔くも罪とよ一茶梅雨兆す

こんなにもさびしいと知る立泳ぎラストシーンならこの町この枯木などの句がある。

登四郎は序文で、「寂びの姿を通してさまざまな喜怒哀楽を描くことを心に傾けている。正直すぎる人間の生き様をつきはなして描いている。私小説というより映画のワンカットに近い」と述べている。大牧さんも登四郎山脈の大きな一つの山をなす存在で結社の流儀に与するのではなく、独自の個性を俳句に生かした作家であった。

大牧さんは、現在の沖の神奈川支部の前身の「沖京浜句会」を立ち上げ、大井町の会場で登四郎の指導を仰ぐ句会を運営して下さった。私も時折この句会にも参加し、お酒の席にもご一緒した思い出がある。

大牧さんは能村登四郎が受賞した、「現代俳句協会賞」「日本詩歌文学館賞」「蛇笏賞」の三つの大きな賞に加えて、「山本健吉賞」をはじめ数々の賞を受賞されている。

# 木洩れ日

## 森岡 正作

青田とは

槍 句 碑 の 青 春 今 に 緑 さ す  
しんがりは余花の辺りにゐるらしく  
竹の子の腕白盛りが皮を脱ぐ  
薫風 に 解 き 少 女 の 髪 流 る  
夏潮や島の男に惚れたと言ふ  
木洩れ日のいろはにほへと黒日傘  
文豪の書の眠りをり黴の宿

新緑を見たいという希望のもと、私の田舎、秋田県の奥森吉にあるマタギ発祥の地周辺などを巡ることにした。井越芳子・市村恵理・大西朋・菊田一平・鈴木直充・藤本美和子の各氏と私で、角館で新幹線を降り、二泊を山中の別々の宿で過ごし、盛岡へ抜ける旅であった。ドライブは私で、夜のお酒の飲み過ぎを心配されたが、車内では超結社の方々の、俳句を離れた話題の豊富さとその笑いに、眠気など感じるはずもなかった。また、山中を抜けるとどこも水田風景であり、新緑と田圃の水色で心も眼も洗われる思いであった。登四郎先生の俳句を読むと、色ではよく青が詠まれていて、春夏秋冬の田圃の景もまた多い。へ青田とはよべぬさみどり千枚田へ青田路それで身に湧く風をきくへ田を植えて二三日の苗そよぎそむ、旅では棚田も見たので、先生のこれらの句にはただただ感服するばかりである。きっと六人の方々にも佳句が生まれることと思っている。

# 能村登四郎の軌跡〔11〕

能村 研三

## 板前は教へ子なりし一の酉

『民話』昭45

登四郎の教師時代の写真を整理していると生徒と撮った写真が多く出てくる。そのいずれの写真を見ても、温顔でやさしく生徒を見つめる眼がやさしい。学校で生徒からつけられた渾名は「おうまさん」。勿論馬のように長い顔をしていたからだが、後に昔の卒業生から聞いた話だと、悪さをした生徒を叱る時も追い掛けてくる速さが馬のように速かったからのようだ。一の酉の帰り浅草の料理屋に立ち寄ったら、白衣、前掛けをした板前から「先生」と声を掛けられた。登四郎にとっても心が温まる瞬間であった。

## 蘆の絮飛びひとつの民話ほろびかね

『民話』昭46

第四句集『民話』の題名はこの句から採られた。あとがきにはこの句の他にも民話風が多いのでつけたとある。〈鋤鍬のはらから睦む雪夜にて〉などが民話風の句であろうか。登四郎は自らの句集の装丁にも拘りがあり、句集『民話』の表紙の黒地布装に金箔で押した「一本角邪鬼」の凶の筆をとり、函と共に自ら装丁している。この句は「蘆の絮飛び」と上七ではじまる句であるが、下五の「ほろびかね」は「ほろびまい」としている」という意だが、危うきものへの思いを募らせている。



## おぼろ夜の靈のごとくに薄着して

『民話』昭46

臘の夜気の中不用意に薄着をして外出したら、夜の冷えが着物を通して体に沁みてきて寒い思いをした。痩せている登四郎にはこれが何か靈のようにふと感じた。いろいろ俳壇で評された句で、色紙や短冊などに揮毫を頼まれるとこの句を書いていたことが思い出される。ただ評をしてくれた人の鑑賞が皆それぞれの得ていなかったそうで、登四郎自身も「正解を示すことの出来ない甚だあいまいな発想の句で、割り切れない部分が俳句の要素なのだ」と言っている。

## しじみ蝶ふたつ先ゆく子の靈か

『民話』昭46

「われに早世の二児あれば」の前書がある句。登四郎の國學院時代の学友で沖にも投句するようになった青森の三浦壽禄さんの誘いで尻屋岬、下北半島の恐山を旅した。私はまだ大学生であったが北海道のカニ族の旅をした後、青森で合流した。二人の子どもを亡くして二十余年が経っていたが、亡き子への思いは癒えるものではなかった。登四郎は「二人の子を歿している私にはこの山に子供たちの靈が住んでいるような気がしてならなかった。」と述べている。

# 蒼茫集



風呼ぶ

田所節子

よろめきぬ

甲州千草

涼やかに波生む作務の高箒

\* 麻のれん奥に敵手の声したり

無造作に活けて風呼ぶ青芒

樵新樹あをあを日ざし透いてをり

ダンボール敷き若草のすべり台

徴きざす書棚の奥の入門書

来る人に鍵開けておく柿若葉

子子に関はりすぎてよろめきぬ

坂下る柚の花明りみほとりに

\* 縄束のどさりと祭連れて来る

げんげんや誰に会ふでもなく歩く

莖立菜時間に無駄の無かりけり

令和

和

上谷昌憲

序列

千田百里

雀色どき雛罌粟は群れてこそ

蒲公英の絮吹き何となく棄権

\* 更衣しのつく雨となりにけり

不揃ひの苺を潰す怒り肩

自転車の五人連なり代田寒

夜の春雷二つ令和のことぶれに

\* 虫出しやペンケースのペンに序列

芽柳の千筋の糸や令和祝ぎ

愛鳥週間皇后カナリア色の服

お茶筒のぽんとものいふ立夏かな

葛餅の黄粉は蜜を避けたがる

誰が撒きし九十九島や明易し

花 筏 今瀬一博

人出でし穴ぼつかりと春炬燵  
蛇穴を出て本能の目覚めざる  
花筏ひとひら加へ重ならず  
\*花屑や渦に大きな遠心力  
藤映す水あり風の騒ぐなり  
何ごともなかつたやうに水張田

一 樹 岡部玄治

そのなかの一樹もつとも囀れり  
杣出しの轍もうすれ蝶光る  
大池のどこに漕ぐとも落花中  
空き殻となりても動く海胆の棘  
世をしのぶ色さながらの花あけび  
\*一天の全き青に耕せり

童話の国 宮内とし子

白牡丹色あるものを圧倒す  
\*霾や古文書ケースに湿度計  
山笑ふ歩く早さの耕耘機  
青嵐抱き合ふかに道祖神  
小指より童話の国へ天道虫  
吊り革の手首の細し更衣

ホームドア 林昭太郎

言の葉の孵化するを待つ臚の夜  
廃炉にも要す歳月鳥帰る  
蜂蜜に花粉の苦み霾ぐもり  
霾や一斉に開くホームドア  
江ノ電の木の床匂ひ夏来る  
\*みどりの日肺活量を計らるる



# 潮鳴集



壁の節くれ

須賀ゆかり

仔牛

栗坪和子

\*ふらここや風はいつでも新しい  
裏庭に髪を乾かす海女の昼  
花は葉に紙幣変はるといふニューース  
アスファルト工事の匂ひ夏近し  
外気舎花と緑の吟行会の壁の節くれ冴返る

風光る仔牛は鼻輪もらひたる  
\*風にのる卯波は機を織るごとし  
行く春や砂を吐きつつ貝動く  
とこしへの明治の遺産薔薇芽吹く  
舟杭のなき心字池亀鳴けり

船の羽化

小林陽子

ハモニカ

大沢美智子

縄跳びの大波小波飛花落花  
電気ブラン舌にちりつと荷風の忌  
行く春のカーブミラーに湖光る  
太陽の火のひとつしづく天道虫  
\*帆を張れば船の羽化する風五月

麦秋や生まれ日印すモルト樽  
\*夕さりのハモニカ茅花流しかな  
夕薄暑自炊の荷風思ひけり  
鉄瓶の蕎麦湯とろりと余花の雨  
鍵盤に十指昂るみどりの夜

# 飛鷹選評



能村 研三

みちのくの山まじさらな桜かな 村上 菓子

みちのくの桜といえば弘前の弘前公園、角館、北上の展勝地などが有名で、関東の桜のあと日本を北上して順に見ころを迎える。私も今年は花巻で一度見納めとした桜を再び見ることができた。村上さんもみちのくを旅行され二度目の桜に遭遇し、関東で見た桜とは違う感慨にふけたのだろう。みちのくの桜はその花時の少し前まで雪に鎖されていることが多く、桜の花にも特別な思いが募る。

沖へ出て羽の生まるる春の雲 木村あさ子

メルヘンを感じさせる句である。春の雲はうすぼんやりと太陽がかすんで見え、おぼろ雲と呼ばれたりもする。全天を覆うことが多く、厚いときは太陽や月を隠し、雨や雪を伴うことがあるが、雲の奥では春の光が活動し始める。太い刷毛でそっと刷いたように、沖の彼方にふわふわとしたまるやかさで空に浮かんでいる雲からは、羽が生まれるようにも見える。

さくらさくら雨遠ざけてゐる活気 石橋みどり

「さくらさくら」では、山頭火のくさくらさくらさくらさくらちるさくら」という句があるが、掲句の出だしの表現は、「さくらさくら」と畳みかけるように表現することで、満開の桜が咲き誇り、心の中が弾むような気分になる。今にも降りだしそ

うな空をも待たせて雨を遠ざけているようにも思えた。

葉桜や躰の芯にあるゆらぎ 仲里 貞義

桜が散ったあと日増しに緑が広がっていくのも、いかに初夏のすがすがしい光景である。咲き誇る花の時季とはちがった新鮮さととつて替わる。葉と葉の間からは、五月の明るい太陽が射してくる。風が吹くと葉はいつせいに揺れて、まるで空が騒いでいるかのようで、躰の芯まで揺らいでいるようでもある。

咲く力秘めて鎮もる牡丹かな 伊藤よし江

牡丹は中国から渡来した花で花の王とも言われている。枝の先の燃えるような赤い芽には力強さがあり、初夏に咲く大輪の花を想像させられる。やがて、白や紅、黒紫など美しい花を咲かせる。花の姿は華麗だが、牡丹には咲ききる力と散る力を静かに秘めている。

春風やミシンに弾む赤い糸 小形 博子

ミシンは最近は身の回りにはあまり見られなくなった。ミシンというと母の姿を思い浮かべ、懐かしく感じられる。昔は足踏みミシンが廊下にあつて衣服を手作りで作つてくれた。廊下に通う春風も心地よく、赤い糸がミシンの糸巻きに弾むように音を立てていた。

牡丹に一枝一花の炎あり 角口 秀子

同じ館山の伊藤よし江さんも牡丹を詠んでおられたので、一緒に牡丹を詠む吟行をされたのだろうか。「百花の王」「花神」とも称される豊麗な大輪の牡丹が、一枝に一花をつけて炎が燃えているように、初夏の陽を浴びて咲いていた。

# 沖作品



## 能村研三選

\*みちのくの山まつさらな桜かな

干し網の目を吹きぬける春の風  
これからを静かに待てり水張田  
ひとり来て舞ひ散る桜追ふ少女  
戻り来し恋猫限りなく寡黙  
父祖よりの畑は減らさず葱坊主

千葉

村上 葉子

青森

木村あさ子

\*沖へ出て羽の生まるる春の雲

春雨や干されし魚網にほひ立つ  
前山の迫り出し始む五月かな  
職終へて夫のゐる家春灯  
\*さくらさくら雨遠ざけてゐる活気  
傍らに句帳弁当花の下  
詠みきれぬ季語の数数春惜しむ

熊本

石橋みどり

初夏をめぐる令和のひびきかな  
新樹光ご朱印を待つ長き列  
\*葉桜や躰の芯にあるゆらぎ  
埒越ゆることも時には芝桜  
赤チン去り仁丹のこる昭和の日

埼玉

仲里 貞義

千葉

伊藤よし江

\*音の無き里曲の真昼春深く

満天星の満ちて音なくさゆらげり  
廃校の尊徳像や春惜しむ  
\*咲く力秘めて鎮もる牡丹かな  
髪面の眼は少年朝寝して  
囀りや閑伽桶の水溢れをり  
花筏 鯉 反転の水光る  
\*春風やミシンに弾む赤い糸  
寄席囃し下谷神社の雀の子

小形 博子